

## 第 26 回 甲南英文学会 定期総会・研究発表会のご案内

2010 年 6 月 14 日  
甲南英文学会会長 青山義孝

甲南英文学会会員各位

本年度の総会、および研究発表会・講演会を以下の要領で開催いたします。ぜひともご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

### 記

日時：2010 年 7 月 3 日（土） 午後 13 時 30 分より  
場所：甲南大学 2 号館

### プログラム

13:30 – 14:30 総会 (2 号館 1 階 211 教室)  
議題 1 2009 年度決算報告  
2 2010 年度予算案  
3 会費値下げ案について  
4 その他  
報告 1 編集委員会より  
2 その他

14:40 – 16:00 個別研究発表 (各発表 30 分、質疑応答 10 分)  
[英語学] 2 号館 1 階 211 教室

司会:古川 武史 (福岡工業大学)

「態不一致現象の削除体系」

根之木 朋貴 (甲南大学・非)

「日本語疑問詞のオンライン処理にみる距離の効果について」

中谷 健太郎 (甲南大学)、小野 創 (近畿大学)

[英米文学・文化] 2 号館 1 階 213 教室

司会：大森 義彦 (甲南大学)

「紙の上のエメラルド・シティ *The Wonderful Wizard of Oz* と紙幣制度」

秋元 孝文 (甲南大学)

「悪事を教えたのは誰か? : Mark Twain と母親 Jane Lampton Clemens」

和栗 了 (京都光華女子大学)

16:20 - 17:50 講演会 (2号館 1階 211教室)

司会：中島 俊郎 (甲南大学)

「英国作家たちのパブリック・スクール風景」

松村 昌家氏 (大手前大学名誉教授)

講演者プロフィール

同志社大学、神戸女学院大学、甲南大学教授を経て、現在大手前大学名誉教授。主な著書に『ディケンズとロンドン』(研究社出版, 1981)、『明治文学とヴィクトリア時代』(山口書店, 1981)、『水晶宮物語 ロンドン万国博覧会 1851』(ちくま学芸文庫, 2000)、『ディケンズの小説とその時代』(研究社出版, 1989)、『ヴィクトリア朝の文学と絵画』(世界思想社, 1993)、『十九世紀ロンドン生活の光と影 リージェンシーからディケンズの時代へ』(世界思想社, 2003)、他に編纂書、訳書など多数。

18:10~20:00 懇親会 (生協 2階 レストラン)

出席・欠席の旨は同封のハガキにて必ずお知らせください。欠席される方は、委任状にも署名・捺印をお忘れなきよう、よろしく願いいたします。

【役員会について】本年度の役員会は、10号館 8階準備室(L-810)にて午後 12:00 より開催予定です。役員の方は万障繰り合わせのうえ、ご出席をよろしく願いいたします。

## 研究発表要旨

[英語学]

態不一致現象の削除体系

根之木 朋貴 (甲南大学・非)

これまで、受動態の分析では Jaeggli (1986)の受動形態素(en)を項として用いる分析、Collins (2005)による VoiceP の構造を詳細化した分析など、様々な形で分析されてきた。本発表ではそれらの通常見られる受動態構造ではなく、主に(1a-b)に示されるような、先行文と削除文の受動態と能動態とで異なる態の不一致現象(voice mismatch)にみられる削除構造がなぜ非文法性を示すのかに焦点を当て、その適切な派生体系を考察することを目的とする。

(1) a. Active antecedent, passive ellipsis

\*Some **brought roses**, but lilies were by others. <brought>

b. Passive antecedent, active ellipsis

\*Roses **were brought by** some, but others did lilies. <bring>

この種の削除文(1a-b)に対して Merchant (2007)ではそれぞれ(2a-b)の構造を仮定している。

(2) a. Active antecedent, passive ellipsis

[TP Some [<sub>FocP</sub> roses<sub>j</sub> [<sub>Foc'</sub> **Foc[E]** [<sub>v\*P[E]</sub> bring<sub>i</sub> v[voi:act] [<sub>VP</sub> t<sub>i</sub> t<sub>j</sub> ]]]]]

... [<sub>TP</sub> lilies<sub>i</sub> were [<sub>FocP</sub> lilies<sub>j</sub> [<sub>Foc'</sub> ~~**Foc[E]**~~ [<sub>v\*P[E]</sub> t<sub>i</sub> v[voi:pass] [<sub>VP</sub> bring t<sub>j</sub> ]]]]]]

b. Passive antecedent, active ellipsis

[TP Roses were [<sub>FocP</sub> lilies<sub>j</sub> [<sub>Foc'</sub> **Foc[E]** [<sub>v\*P[E]</sub> t<sub>i</sub> v[voi:pass] [<sub>VP</sub> bring t<sub>j</sub> ]]]]]

... [<sub>TP</sub> others<sub>i</sub> did [<sub>FocP</sub> lilies<sub>j</sub> [<sub>Foc'</sub> ~~**Foc[E]**~~ [<sub>v\*P[E]</sub> t<sub>i</sub> v[voi:act] [<sub>VP</sub> bring t<sub>j</sub> ]]]]]]

Merchant は削除素性付与(e-GIVENness)の条件のもと E 素性が付与された句は削除の対象となるものと主張している。(2a-b)の構造上 E 素性は VoiceP を超えているため削除できないと仮定することで(1a-b)の非文法性を説明している。また、Johnson (2005)はこのような削除対象になるには v\*P レベルを標的としなければならないことが義務的であるとし、音韻投射(p-projection)上の削除過程を提案することで(1a-b)の非文法性を説明している。だが、これらの分析には、Merchant は VoiceP との位置関係を確立するという結果を見据えた上で FocP が成立しており、一方 Johnson も音韻投射を成立するという結果を得るためだけに空範疇(pro)を設定しなければならない、といったように、これらの想定自体に余剰性が多く見られ、またその動機付け自体もあいまいであるという問題点が見られることを指摘する。

そこで、こうした問題点を解決するために本発表では Chomsky (2006)の C-T の継承体系をさらに by 句による p\*P 継承体系分析へと拡張することでこのような想定を改めて設定することなく受動態構造とその削除過程が説明できることを提案する。

(3) a. by-phrase formation; [<sub>PP</sub> [p' by ] [<sub>NP</sub> others ]]

b. p\*-P inheritance; [<sub>p\*P</sub> by [<sub>p\*φ</sub> [voice:pass] [<sub>PP</sub> other [p' t<sub>φ</sub> [p t<sub>by</sub> t<sub>others</sub> ]]]]]]

c. merger of v\*P; [<sub>v\*P</sub> brought<sub>[-case]</sub> lilies ] [<sub>p\*P</sub> by [<sub>p\*φ</sub> [<sub>PP</sub> others ...

d. VoiceP formation; [<sub>voiceP</sub> [<sub>v\*P</sub> lilies [<sub>v\*φ</sub> brought<sub>[-case]</sub> t<sub>lilies</sub> ]]] [<sub>voice'</sub> φ [voice:pass] [<sub>p\*P</sub> by [<sub>p\*φ</sub> [<sub>PP</sub> others ...

e. deletion; lilies<sub>i</sub> were [<sub>voiceP</sub> [<sub>v\*P</sub> t<sub>i</sub> brought<sub>[-case]</sub> ]]] [<sub>voice'</sub> φ [voice:pass] [<sub>p\*P</sub> by [<sub>p\*φ</sub> [<sub>PP</sub> others ...

(3a)で形成された by 句は(3b)で示すよう通常の軽前置詞句と同様の形成過程を経て(3c)で示すように軽動詞と併合する。次に受動態構造を形成すべく(3d)で VoiceP が形成され(3e)のような削除は素性照合を完全に経ているにも関わらず VoiceP 全体の削除がなされていないため結果的に(1b)は非文法的となる。なお、(1a)にも同様の派生を展開し、排除する。

また、最後に本発表の分析は、get を用いた受動文、二重目的語構文と与格構文などの交替と削除体系の振る舞いの違いを分析する際にも拡張できることを主張する。

参考文献

Chomsky, Noam. 2006. Approaching UG from below. Ms., MIT.

Collins, Chris. 2005. A smuggling approach to the passive in English. *Syntax* 8:81 – 120.

Jaeggli, Oswald A. 1986. "Passive," *Linguistic Inquiry* 17, 587-622.

Johnson, K. 2005. Ellipsis as Phonological Projections.

Merchant, J. 2007. Voice and Ellipsis. Ms., University of Chicago, Chicago, Ill.

#### 日本語疑問詞のオンライン処理にみる距離の効果について

中谷 健太郎 (甲南大学)、小野 創 (近畿大学)

ヒトがリアルタイムに (=オンラインで) 文を処理する際、統語構造的条件が作業記憶に負荷を与える可能性が古くから指摘されてきた(Yngve, 1960; Chomsky & Miller, 1963; Kimball, 1973; King & Just, 1991; Gibson, 1998, 2000; Van Dyke & Lewis, 2003; Levy, 2008)。この仮説のもとでは、入力となる語がすでに構築された構造に導入される際に特定の条件で処理負荷が生じることになるが、下位仮説として、「距離の効果」の存在が提唱されている(King & Just, 1991; Gibson, 1998, 2000; Van Dyke & Lewis, 2003; etc.)。例えば、入力語  $w_1$  が既存の語  $w_2$  と何らかの文法関係を確立する際に(以降、これを統合 integration と呼ぶ)、 $w_1$  と  $w_2$  が隣接している場合とそうでない場合では、後者の方が作業記憶への負担が大きいと考えられる。

ところが、統合における距離の効果は主要部後置言語では見られないことが報告されている(ドイツ語については Konieczny, 2000; Konieczny & Doring, 2003; ヒンディ語については Vasishth, 2003; Vasishth & Lewis, 2006; 日本語については Nakatani & Gibson, 2008, 2010)。これにより近年は、統合の負荷よりも、統合に先立つ先読みの「期待」により、処理が速くなるという、「期待の効果」が提唱されている(Hale, 2001; Levy, 2008; Bresnan et al. 2007; etc.)。

では、日本語のような主要部後置言語においては、構造の複雑性は処理の負荷にまったく寄与しないのだろうか。Nakatani (2009)は、日本語の否定対極表現の処理を自己制御読文実験により検証し、「期待の効果」とは裏腹に、距離の効果が見られることを報告した。本発表では、別種の文法的依存関係である、疑問代名詞と疑問詞の処理における距離の効果を下のような条件で検証した。

- (a) Distant / Hi-Q: [ 誰が [ 先生が 茶髪の 生意気な 学生を ひどく 叱ったと ] 信じているか ] 教室で 保護者は 聞きました。
- (b) Local / Hi-Q: [ 先生が 茶髪の 生意気な 学生を ひどく 叱ったと ] [ 誰が 信じているか ] 教室で 保護者は 聞きました。
- (c) Distant / Mid-Q: [ 誰が [ 先生が 茶髪の 生意気な 学生を ひどく 叱ったと ] 信じていると ] 教室で 保護者は 言いましたか？
- (d) Local / Mid-Q: [ 先生が 茶髪の 生意気な 学生を ひどく 叱ったと ] [ 誰が 信じていると ] 教室で 保護者は 言いましたか？

結果、下線を引いた「信じているか／信じていると」の領域において、Distant 条件の方が読みが遅いという方向で強い距離の主効果が見られた。このことは、文の処理の負荷が「期待値」のみに左右されるという仮説に反するものである。一方、上記の実験文の文末動詞の領域を分析すると、疑問詞「か」が付加されていることの強い効果が見られたが、距離の効果はまったく見られなかった。この結果からは、疑問詞の処理自体に距離の効果はないという可能性が考えられる。もしそうだとすると、下線を引いた「信じているか／信じていると」における距離の効果は、疑問代名詞と疑問詞ではなく、疑問代名詞と述語の統合処理における距離の効果であるということになるかもしれない。このことが文処理の理論に対して何を示唆するのかは、議論の余地が残されている。

[英米文学・文化]

紙の上のエメラルド・シティ *The Wonderful Wizard of Oz* と紙幣制度

秋元 孝文 (甲南大学)

Frank Baum の手によるアメリカを代表するファンタジーの名作 *The Wonderful Wizard of Oz* (1900) について、1964年の Henry M. Littlefield 以来、この作品を19世紀末アメリカのポピュリズム運動およびその最大の争点であった貨幣政策をめぐるアレゴリーであるという読みが存在する。作品中で言及されるさまざまな「金」「銀」は1896年の大統領選の争点となった金本位制と bimetallism (金銀複本位制) の争いを表し、かかしは農民、ブリキのきこりは東部の工業労働者、臆病なライオンはフィリピンなどへの拡張政策に消極的だった民主党の大統領候補者 William Jennings Bryan を表す、というように実在の出来事や人物を作品に当てはめるアレゴリーとしての読みが提出され、この解釈の骨子にのっとった上で、主に歴史、経済分野の研究者による様々なヴァリエーションが紡がれてきた。そういった読みがいきつくのは、当然、「では、作者 Baum 自身はどのような立場や意図からそのアレゴリーを書いたのか?」という関心であり、彼が民主党であった、いや共和党寄りであったという作者自身の政治的姿勢が議論されることになる。しかし、こうした歴史学者やアメリカ経済史家の立場からの読解の、作品とのあまりにも美しい符合に驚きを禁じ得ない一方で、作者の意図という批評理論がその始まりからして否定したところにテキストの解釈を求めることにはためらいを感じる。すでにニュー・ヒストリシズムを経て、歴史というのが静的で固定化されたものではなくむしろたえず書きかえられる動的なもので、テキストが歴史によって生み出され、同時に歴史を生み出すということを知った文学研究がとるべき立場は、むしろテキストの意味を作者の意図に帰すという手法に抗いながら、同時代的イデオロギーを反映したりあるいは転覆しようとする存在としてテキストを読みとくことではないだろうか。Littlefield に始まる19世紀末ポピュリズム運動のアレゴリーとしての読みの成果である、bimetallism と金本位制という対立する二つのディスコースがテキストの中でアレゴリー化されている可能性を踏襲した上で、今回はさらにこの貨幣の back をめぐる論争に加えて「紙幣」という視点を導入することで、この読みをもう一步前進させることを試みたい。すべてが緑色に見えるエメラルド・シティにグリーンバックと呼ばれるアメリカ紙幣を読み込むことから、紙幣の本質をめぐる同時代的議論へと射程を延ばし、テキストという場で覇権を争うもうひとつのディスコースとしての紙幣的アレゴリーの可能性を探ってみる。

悪事を教えたのは誰か? : Mark Twain と母親 Jane Lampton Clemens

和栗 了 (京都光華女子大学)

Mark Twain は Missouri 州 Hannibal の家を出る際に三つの誓いをたてさせられたという。酒を飲まない、賭け事をしない、悪態をつかない、の三つである。誓ったのは彼の父親が死んだ11歳の時とも言われ、17歳で家出した時だったとも言われている。誓いは、禁酒と賭けごとに関する二つだったという説もある。いずれにせよ、この道徳的誓言が Twain の家庭観や結婚観を左右し、創作にも大きく影響したことは明らかだ。

この三つの禁止事項を誓わせたのは母親 Jane Lampton Clemens (1803-90)だが、この三つの行為を十代前半の Twain の目の前で見せたのも母親であった。つまり悪事の見本は母親だった。Twain が母親に書いた手紙を読むと、母親がトランプのポーカーを楽しんだことがうかがえるし、彼女がしばしば悪態をついていたことは間違いない。ただし、母親の飲酒に関しては状況証拠も無く、不明である。

禁忌を課した母親がそれを破っていたという矛盾を発見した時、Twain は人間観察の面白さに気づいたに違いない。Twain は母親の矛盾を知りつつ、母をからかって楽しんだ。母親が Twain の手紙を他人に読み聞かせる癖があることを知った上で、Twain は母を揶揄する言葉を手紙に

書いた。母親が自慢の息子からの手紙を読み上げるとそこに自分を物笑いの種にするようなことが書いてあるのだ。母親宛の書簡には Twain の諷刺精神の一つの根本が表れているのだ。

同時に、矛盾した母親は、ある種の反面教師として理想的妻と理想的結婚についても教えた。Twain の結婚観は、女性を崇拜しながら、男女の平等性を求めるものだった。中世的であり、かつ当時としては進歩的な結婚観は主に母親を観ながら Twain が作りあげたものだろう。母親の恋愛話も Twain は聞いていたらしい。この母親はいくつもの欠点を子供に見せながら、理想を説く人物だった。

19 世紀アメリカの一定以上の社会階層の人々にとって、母親は女性としても親としても完璧でなければならなかった。何が「完璧」なのか議論は残るが、理想的家庭が賞賛された時代である。Twain の妻 Olivia Clemens (1845-1904) はほぼ理想に近い人物だったようだ。少なくとも Twain は理想的だと信じていた。

母親 Jane Lampton Clemens から理想的妻 Olivia Clemens に至る道のりには紆余曲折があったが、母親は Twain の人間観とその表現に大きな影響を与えたのである。